

# 園長通信

## (令和7年度12月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園

園長 岡部 祐輝

### 【子ども一人ひとりの違い～感じ方・とらえ方も異なる～】

11月は大阪府内でもインフルエンザ等の流行が続き、当園でも学級閉鎖を実施するなど、保護者の皆様には多方面でご対応いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

このような状況の中でも、園では秋ならではの自然物との出会いや、それらの素材を活かした製作活動、友達の存在を感じながら進めていく活動——例えばクラス発表会に向けた取り組み——が進んでいきました。

こうした活動の広がりの中では当然、「自分の思い通りにいかない」「思いを受け止めてもらえない」「やりたいことが重なり、我慢が必要になる」など、うまくいかない出来事や葛藤、友達とのいざこざが起こることがあります。幼児期は、発達の違いや一人ひとりの感じ方の違いが大きく、次のような姿が見られることもあります。

- 言葉で伝えることが難しく、つい手が出てしまう
- 聞いていないように見えて実は聞いている／聞いているように見えても理解が難しい
- 理解はしているが行動に移るまでに時間がかかり、活動が遅れてしまう
- 普段は落ち着いていても、ざわざわした環境が苦手
- 「1番」であることに強くこだわり、順番を抜かされると怒る
- 「じっとしていなさい」と言われても、身体を止めておくことが難しい
- みんなの物であっても、自分が先に使っていた物を取られると怒る

上記はあくまで一例ですが、こうした行動が見られた際、「悪いことをしたら毅然と指摘する」「善悪がわかるまで何度も“ダメ”と言い聞かせる」「やりたくないでも頑張ってやらせる」といった、これまで用いられてきた“しつけ”的な方法は、すべての子どもや状況に適用できるわけではありません。

なかには、「その関わり方では甘いのでは?」「なぜそこで肯定的な声かけをするの?」と思われる場面もあるかもしれません。しかし、園では以下のよう考え方を基盤に、援助・支援の方向性を定めています。

#### ●望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らす関わり

応用行動分析（ABA）やポジティブ行動支援の視点を参考にしています。

#### ●自分の自由が相手の自由を損なうとき、立ち止まって考える

哲学者ヘーゲルなどが提唱する「自由の相互承認」の考え方をベースにしています。

#### ●子どもの主張や気持ちを受け止めたうえで切り返す援助を行う

「そういう気持ちだったんだね」「嫌だったんだね」という受け止めに続けて、「次は～と言おうね」「これでよかったかな？」など、考える機会につなげます。

園では、子どもを「子ども扱いしすぎない」こと、つまり一人の人として尊重し、そのうえで子どもの発達段階や状況に応じた、**伝え方・言葉・タイミング・援助内容の調整**を大切にしています。

例えば前述の「自分が先に使っていた物を取られて怒る」場合、怒りの結果として友達をたたいてしまったからといって、「その場で強く叱ることをすれば理解できる」という単純なものではありません。危険があった場合は即時的な介入や真剣なトーンでの声かけは、場合により必要ですが、その後に長く叱り続けたり、大人が一方的に話し続けたりすることの効果が薄いことも、最新の知見等でわかっています。

子どもの置かれた状況や発達の段階を踏まえ、「受け止めるべき部分」と「改善を促したり考えたりする部分」を見極めながら、個別最適な対応を進めてまいります。どうか園の基本姿勢についてご理解いただけますと幸いです。

## 【クラス発表会のねらい】

12月には、各クラスごとに「クラス発表会」を行います。どの学年も共通して、「**日常の遊びや興味関心をもとにした子どもたちの姿を保護者の皆様に見ていただく**」ということを大切にしています。

例えば、忍者ごっこが流行しているクラスでは忍者が登場する劇遊びを、運動遊びが盛んなクラスではそれを活かした表現活動を取り入れるなど、子どもたちの“今”的姿を発表につなげていきます。3歳児は「ごっこ遊び」に近い形、4・5歳児は「劇」に近い構造になります。

ただし、幼稚園や保育園で行う発表会では、私たち保育者は、以下のような点は、できる限りないように配慮・工夫して取り組む必要があります。

### ●大人の指示通りに活動することを求める

保育者が決めたセリフ・立ち位置通りに行なうことを過度に意識して保育者が子どもと接する

### ●言わしたこと、習ったことを正確にできることができることが素晴らしいという単一の価値で活動を評価する

教えた通りにできている子どもが素晴らしい、できていない子どもに対して「話が聞けていない」、「集中力がない」などの評価をするなど、一つの物差しだけで評価をしてしまう

### ●子どもを意味もなく待たせたり、受け身の活動にさらす

技術定着を図るために、保育者が個別ないしは小集団での指導に力を入れすぎた結果、他の集団に意識が向かず結果として活動量が少なくなる

保育者の指示がないと、活動してはいけない、意見を言ってはいけないというような雰囲気になる

## ●子どもが考えたり、創意工夫したり、表現したりする機会を大人が奪う

見栄えをよくするという名のもと、「衣装/大道具/小道具/セリフ/表現（ダンス・ポーズ）」などをすべて保育者が巻き取って考え準備してしまい、子どもが考える機会が著しく少なくなる。

さらに学校教育等では、「行事当日にピークを持っていくように」という考えも一部存在しています。私はこの考え方に対して大変懐疑的な見方をしています。もしかすると、ピークが早く来てしまうと困ってしまう対象は、教師・保育者であり、「当日に最高潮のピークの仕上がりを保護者の方に提供する」を最優先にした、「大人の評価事情」ではないかと思うときがあります。

私自身、小学校勤務で担任の時に演技指導を自らがしていましたが、例年同じ日本の伝統的な踊りをしていたこともあり、「去年の学年より、仕上がりがよくなかったなど、見ている方々に比較されないだろうか」という思いを無意識に抱えていた経験が少なからずあります。練習に熱が入ること自体が悪いわけではありませんが、「誰のために熱心にするのか」、「誰のための何のねらいでこの活動をしているのか」を見失う危険性があったとふりかえっています。またそれらが過度に行き過ぎると、子どもの学びや育ちに関係のない、繰り返しのトレーニング、不適切な言動を用いた指導などにつながる可能性も0ではありません。また当然保護者の方がこのようなことを望んでいるとは到底思えません。このようなことからも、「子どもの姿や想いをもとに保育者がねらい・ねがいと合わせて、活動や取り組み方法を柔軟に考えていくことが重要です。

私たち大人はどうしても、「**ひとつの評価軸**」で評価をしがちです。発表会で考えると、「**舞台の上に最初から最後まで立ち、練習通りに発表していた**」という事実に対し、「**参加していた**」、「**がんばっていた**」と評価しやすいかもしれません。しかし、幼児期の子どもたちにとって、たくさんの大人の目が一斉に集まる舞台上は、大人が考えている以上に緊張する場所です。また、暑かったりまぶしかったり、音響がうるさく聞こえたりなど、「いつも」の環境と異なっていることもあります。そのような中で、**途中で集中することが難しくなることや、泣いてしまうこと、保育者のそばで補助・援助を受けながら発表すること、大道具を動かす形で参加することなど、様々な形、量の「参加」する姿**になることもあります。

「**参加できた・できなかった**」という0:100の考え方ではなく、幼児期の子どもの発達を踏まえ、**「～をしようとした」、「～が育とうとしていた」、「～の部分は頑張ろうとしていた」**など、過程を足し算で見ていくまなざしも、私たち大人が、改めて持っていきたいと思います。

クラス発表会については、お伝えしております各クラスのこれまでの経過や出来事、そしてねらいなどを事前にぜひご覧いただき、当日の姿を見ていただけますと幸いです。子どもたちへの大きな声援、励ましのお言葉をどうぞよろしくお願ひいたします。



劇遊びで使う「背景の絵」を保育者と子どもが相談しともにつくっている場面